

KAN—SEN嫌いの指揮官

不浄紅顰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語はKAN—SEN達を嫌っている指揮官の日常を綴った物になります。いずれ指揮官の過去も分かっていくようにします。

目次

第壹日	1
第貳話	3
第參話	6
第肆話	9
第伍話	12
閑話其の壱 記憶の破片	14
第陸話 指揮官Side	18

第壹日

はあ……………

今日もまた嫌な生活が始まる…

俺はこの母港の指揮官…つまり様々なKAN—SEN達を指揮するものだ…

今朝まだKAN—SEN達が目覚めていない内にと……

今週の海域出撃、演習、委託の編成を母港の総合掲示板に馬鹿にデカイ紙を掲示板に貼り付ける。これはこの母港においては当たり前前の事である。だが…見つかってしまう。

ベルファスト「おはようございます、ごー」

指揮官「……………」

俺は丁寧に挨拶をするベルファストを横目で見て無視し、執務室へと向かう

ベルファスト「……………久々に御姿を見れたので追及は無しにしておきましょうか。」

俺はこの忌々しい執務室へと辿り着く

指「さて、執務を始めようか…」独り無言で黙々と作業をこなす。本来なら秘書艦を設けるだろうが、生憎俺はKAN—SEN達は嫌っている為に独りだけでこなす。

指揮官「……………さて、早ければ演習の結果報告が入る頃か…」

コンコンとノックの音が鳴る

指揮官「……………入れ」

エセックス「失礼します、指揮官、演習の結果報告書です。」

指揮官「御苦労、各自休息を取るように」

エセックス「……………はい、了解しました。(…いつも独りで大量の書類仕事をこなしているのに疲れた雰囲気は一切出していない…身体は大丈夫なんでしょうか)」

指揮官「……………なんだエセックス、まだ居たのか…」

エセックス「あつ、もつ…申し訳ありませんでした、少し考え事を

してしまいました…。」

指揮官「考え事だと？今俺が独りで書類仕事をしていて無様だなどでも考えていたのか？だとしたらそれは無駄な考えだ」

エセックス「いいえ、違いますよ指揮官。」

指揮官「…何だと？」

エセックス「指揮官、秘書は最低でもお付けになった方がよろしいと思うのですが…」

指揮官「…その必要は無い、そもそも俺はお前達KAN—SENを嫌っている、故に必要なすらない」

短く指揮官の声が響く

エセックス「ですが、着任してから4ヶ月もお一人で書類作業をされてるではないですか！もしかしなくとも過労で倒れてしまいかねません！」

強く言い伏せてくるエセックスは注意を促しているのだろうか…だが…

指揮官「最初の1ヶ月で身体は慣らした、問題は無い」

エセックス「そういつた事ではありません！それでもあなたはこの母港の指揮官なのですよ！もし急に倒れたらどうするのですか！」

指揮官「…倒れたらそれで構わん、嫌々やっっている指揮官生活に終止符がうたれるだけだ、指揮官などもやしのように生えてくるだろう？違うか？」

エセックス「…ああ言えばこう言う！もういいです！私は、指揮官の体調を気にかけていましたけど、もう知りません！」

演習の報告書を俺の机の上に叩き置くのと同時にずかずかと足音を大きくしながら退出するエセックス

エセックス「失礼します！」

ドアが大きな音をたてて閉まる

指揮官「…ふう、やはりそりは合わないか…別に気にもしないかな」

第弐話

指揮官「はあ…今日は海軍のお偉い方が視察に来る…面倒なことこの上ないな…」

そのお偉い方というのが俺を指揮官にしてくれやがった張本人なのだ…

指揮官「さて視察は13:00からだったな（現在12:30）あらはじめKAN—SEN達には事前連絡済みだ…だから問題は無いはずだ…委託も出払う様に時間は調整しているしな」

prrrr:prrrr:prrrr:

指揮官「電話か…あいつからだな」

???'「やあ、指揮官君息災かね？予定通りの時間に到着するぞ」

こいつが俺を海軍に引き入れた張本人だ階級は中将なのである程度の融通がきくらしい

指揮官「息災どころか災難だわ」

中将「…相変わらずの口の悪いところは変わってないな」

指揮官「誰のせいだか、しらばっくれてんじゃねえよクソが」

中将「これは君のためでもある、だからそう邪険にしないでもらいたいものだ」

指揮官「なんで過去を抉ることしかしてきてねえだテメエはよう」

中将「そろそろ到着するぞ、出迎え準備でもしておくれよ」

指揮官「さてと…気に食わないがあいつを呼ぶか…」

ベルファスト「お呼びでしょうか？御主人様」

指揮官「なんで呼ぶ前に来てるんだあんたは…」

ベルファスト「本日はあの中将様がいらっしやるのでしよう。事前連絡されましたよね？御主人様？」

指揮官「ああ、そうだったな行くぞ」

ベルファスト「畏まりました、では参りましょう。」

……………

………

中将「やあ、姿を見るのは久しいねえ」

指揮官・ベル「ようこそお越しいただきました。中将殿（様）」

中将「では、応接間に行こうか」

指揮官「んで、何の用事で此処に来やがったんだクソジジイ」

ベルファストは紅茶の準備を進める

（あのような言動…穏やかな内容ではないようですね）

中将「そろそろKAN—SEN達にはなれてもらえたかね？そうでもないと困るだろうに…」

ベルファスト（…？一体どういう事なのでしょう？御主人様はあまり私達とも会話の無い方ですから…少し気にはなりますね…いけません、準備を進めなければ…）

中将「おお、すまないね…いただくよ」

指揮官「………」

指揮官「んで、なんか問題でもあるのか？KAN—SEN達は現状でも予定表どりにこなしているし、休息も十分に取らせてるし何処に問題があるんだよ」

中将「KAN—SEN達を不用意に避けすぎるのが問題だとワシは言っているのだよ少しは交流を持ったらどうかね？母港内の雰囲気も少し暗いぞ」

指揮官「そもそも俺は指揮官になんかならないと言ってたのに無理やりやらされてる身にもなってくれよ、吐きそうだわさつさと後任寄越せや糞ジジイ」

そうやって俺は机に脚を乗せて悪態をつくベルファストは少し慌てた表情をする

指揮官「………はア、いつまで俺を牢屋に閉じ込めるつもりだ？これからもKAN—SEN達の見る眼は変わらないぞ」

中将「お前自身のためではない世界のためじゃ指揮官になるには適性検査で適性ある者にしかできぬのだからな、そう簡単にはできん」

指揮官「………」

中将「お前には辛い過去だろうが今はセイレーンの殲滅に注力しなければならぬ、その為にもお前に辞めてもらわれては困るのじゃ」

指揮官「……………例えば身内をKAN—SEN達に……………でもか？俺は絶対に許しはしないぞ」

ベルファスト（……………？許さない？どう言う事なのでしょう？もしやご家族に何か御不幸な事があったのでしょうか。）

ベルファストは頭の中で思考を巡らせる…

その後は今後の予定や大規模な作戦の概要を話して終了となりました。

中将様がお帰りになってからも御主人様の話していた事が頭から離れません、実際に直接お話を伺えるか試してみましようか。

どの様に話しを切り出したら良いのかを考えながら、作業に戻る事にします。

第参話

時は流れて中将様の御訪問から1週間が経過致しました。

私は訪問時の御主人様と中将様の会話が頭から離れません、しかし日々のお勤めを蔑ろにする訳にはいきません。

どの様に御主人様にお話を切り出したら良いのかを考えながら給仕と並行しながらではまとめるのには時間が掛かりました。

ベルファスト「さて、本日の給仕はこれで終了ですね。御主人様の元へ参りましょうか」

……………

……………

……………

指揮官「……あれから1週間が経ったか、そろそろ頃合いにはなるだろうな……」

指揮官「面倒事は避けたいが、そうもいかないだろうな」

あの時のベルファストは俺の過去を知ろうとしたいという雰囲気をかもしていたからな……

コンコン……

???'「指揮官、入っても良いか?」

そんな事に思考を巡らせていたら、ベルファストと思い警戒していたが別人だった

指揮官「何の用だ?エンタープライズ?急ぎの案件か?」

エンタープライズ「エセックスの事で話がある」

どうしたものか、エセックスには演習報告の時にいざこざを起こしてしまってたな……、それでエンタープライズが訴えれば改善案を出して貰う様に頼まれたのだろうな……つくづく面倒な奴だな

指揮官「まあいい、入れ」

エンタープライズ「指揮官、失礼するぞ……早速本題なのだが……」

指揮官「俺は秘書艦は絶対に受け入れないぞ、居たら逆に邪魔だ、顔を出していないから陰険な奴だとも思えばいい。何故そこまでする必要がある」

エンタープライズ「うつ、私が言おうとしたことが全部先に言われてしまったな、だが何かあつてからでは遅いんだ！」

指揮官「だからどうなる、俺はKAN—SEN達に対して嫌悪感では無く、存在そのものが嫌いだと言つたはずだ。俺は此処には何の意味のないものでしかないんだよ」

エンタープライズ「……………指揮官は私達を微塵も信用してくれてはいないんだな」

エンタープライズはそう言うのを頭を下げワナワナしている様に見える

指揮官「ああ、微塵も信用したつもりは無い、仮にお前が俺を殺したとしても何も出ないぞ、むしろKAN—SEN達の肩身が狭くなるだけだ上がもみ消すだろうが関係はない」

エンタープライズ「……………」

エンタープライズは完全に無言になってしまった。だがゆっくりこちらに近づいて来て次の瞬間……………

パアアアアアン……………

エンタープライズ「……………」

エンタープライズが俺の頬を思い切り強く叩いた彼女なりに不満な所が爆発して怒りに身を任せてしまったのだろう。

この事態を目の当たりにしたもう一人のKAN—SENが居たことも知らずに……………

ベルファスト「……………エンタープライズ様が御主人様の頬を叩いたのでしょうか？部屋の外まで聞こえてしまいましたよ…大丈夫なのでしょうか？」

ベルファスト「この様子では私が出る幕はないでしょう。また後日うかがうことにしましょうか」

そう思いながら私は踵を返して自室に戻りました。

場面は戻り指揮官とエンタープライズへ……………

指揮官「……………」

エンタープライズ「……………」

エンタープライズ「なんとか言ったらどうだ指揮官」

指揮官「……何も言うつもりは無い、事実だからな、別に上官への暴力行為などでお前を罰したりもしない。面倒な事を増やすな」

指揮官「この話は終わりにしよう、俺は外で頭を冷やしてくれるエンタープライズは部屋に戻れ」

そうやって俺は執務室から母港の港に足を運ぶ事にした

エンタープライズ「……………指揮官教えてくれ、私達はいつになつたら信用してくれるんだ？」

エンタープライズは執務室で涙を流しながら立ち尽くしていた

……………

第肆話

エンタープライズとの言い合いに熱くなり過ぎた為に頭を冷やしてくると言って母港の港先に足を運ぶ

.....

.....

.....

そして俺は今此処で立ち尽くすに至る

そして俺は指揮官になる前の事を少し思い返していた

そしたら不意に気配を感じた

指揮官「.....誰だ、俺は今独りで居たいんだ」

???'「.....そう焦ることはないんじゃないのか？何かあったのか？相談相手にはなるぞ」

指揮官「.....お前には関係ない」

???'「指揮官、だが、そうやっていつまで過去に囚われているんだ？」
そう言うのと勝手に隣に並び立つ、その手には缶コーヒーが2本あった1本を俺に渡してくる。

指揮官「.....お返しはしないぞ、三笠」

三笠「我々、KAN—SEN達を嫌っている割には、名前は覚えて
いるのだな」

指揮官「.....仕事の立場上、覚えない訳にはいかないだろう...」

三笠：重桜のKAN—SEN達の中では古参の部類になる威厳のある奴だ、こういつた事に目を向ける変り者だ。

指揮官「此処には、頭を冷やしに来ただけだ」

三笠「指揮官、何故に頑なに、我々、KAN—SEN達を嫌っているのだ？過去に何か不幸な事があったのか？」

こういつた奴は、妙に感が鋭い所がある流石だ、過去に、東郷平八郎が率いた連合艦隊の旗艦だっただけはあるな

指揮官「仮にその不幸があったとしても、お前達には関係ない事だ。」

三笠「不幸な事があったのは、認めるんだな、指揮官

指揮官「ああ、それは認める。いずれ、ばれるさ此処に長く居すぎると、必ず尻尾を掴む奴が、少なからず出てくるだろう。早く辞めたものだ。」

三笠「指揮官、仮だとしても、辞めるなどの冗談はやめてくれないか？」

指揮官「俺は本気だぞ。指揮官への適性検査は、一定年齢になったら、強制的にやる事になっているからな、男女は問わずだ。」

三笠「では、適性がある者が、全く居ない年もあると言うのか？」
指揮官「ああ、あるぞ。ちなみに数年前は適性者が0人だったぞ。更に言うと、年々に適性者は減っているぞ。」

三笠「年を重ねる度に、減っているとなると、飽和状態になっていると言うのか？」

指揮官「そう言う事だろう、中にはKAN—SEN達に、不当な事をする奴も居るのは、知っているだろう？」

三笠「うむ、知っているとも、中にはKAN—SEN達に、性的暴行や奉仕、虐待などを行なう輩も多く居るとも聞く、嘆かわしい事だ。」

指揮官「そうだな、だからこそ、付かず離れずが重要なのだと思うのだよ。不用意な交流は時として毒になると思う。だから俺は、KAN—SEN達全員と不用意な接触はしない。」

三笠「だが、お前がそのような態度でいると、少なからず、不満を吐露する者が居るたんだろう？」

指揮官「そうだな、既に頬を叩かれた。俺は別に気にしてないが、変えた方が良いのか？もし変えたいなら、お前達が満足する案を出してみろ。それから判断をしよう。明日の朝礼にて、正式に伝達しよう。」

三笠「うむ、少し歩み寄ることが出来た気がするな…。では、我はこれにて失礼しようか」

指揮官「その前に、朝礼前にこの件の事を喋るな、命令だ」

三笠「うむ、承知した」

俺はもう少し此処にしていると三笠に対して言ったら、三笠はすぐにこ

の場を去った。

しかし三笠との会話を聞いていた者に筒抜けになっているとも知らずに……………

「確か、「うむ、承知した」だったかなあ……？」

「と言う事は……重桜のKAN—SENかもしれないわね、正直に言うとも今の待遇には不安があったわ。これは、指揮官に先手を打てるわね。大方のKAN—SEN達は意見は合うと思うだろうから、私はそれについて意見をまとめるから、もう少し起きておくわ。貴女たちは早く寝て明日に備えて頂戴。」

「了解つす、アネキ！」

「そうだね、早く寝よう。」

「達は自室へと戻って行く」

「……盗み聞きとは関心しないわね……？」

「……偶然通りかかっただけだ。それよりもあの者達の言っていた事は真か？」

「あの娘達の事を疑うの？」

「……嫌、そういう事ではなくてだな、本当に指揮官がそんな事を言っていたのが気になったものでな。」

「ええ、私も最初は疑ったわ。でも指揮官と他のKAN—SENが話していたとなると、信憑性はあるでしょう？」

「……確かに、卿の言う通りだろうな。それで、その話はいっ指揮官から通達されるの？」

「明日……と言うかももう日付が変わってるから今日の朝礼の時に通達されるはずよ。」

「……そうか、なら卿の意見は我々の意思そのものだからな。期待しておくぞ。」

「……は去って行く。」

「さて、早く意見をまとめて準備をしないといけないわね……」
「そう思いながら彼女は自室へと戻って行くのであった。」

閑話其の壱 記憶の破片

三笠との会話を切り上げて、執務室に戻る。

エンタープライズはまだ執務室に居るのだろうか？

そのような事を考えてはいたが、執務室に到着する。

指揮官「流石に、自室へと戻って行ったか……。つい、俺はカッと
なつてしまった。別に構わんが。流石に今日は色々ありすぎたな……。
寝るか？」

そうして俺は、執務室の隣の自室へと向かう。

随分と質素なものだと思う。独り身故にだろうか。

指揮官「さて、寝よう。」

シャワーも浴びずにベッドに入った。

そして微睡眠の中と意識を落とした。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

指揮官「.....ん？何だこの空間は？」

そこに広がるは暗闇の空間に俺は立たされている。

指揮官「悪質なジョークだなおい。」

???「ジョークではないぞ。」

指揮官「は？」

俺はその声の主を探す。だが暗闇に遮られて居場所がつかめない。

???「お主はもう少ししあのおなご達を信用したらよいではないか。お
主を慕う者も少なくはないぞ。」

指揮官「そいつは無理な相談だな。あいつ等は人の革を被った兵器だ。そんな奴らをどうやって信用しろと?」

???「お主は、過去にあのおなご達に何かされたのか?それにしても扱いが損材すぎではないか?」

指揮官「お前なんかに理解されたくもねえし、理解されようとしたくもねえよ。別に関係ないだろ。」

???「お主はあのおなご達をどう思っておるのじゃ?少なくとも人類の味方ではないか。」

指揮官「今は、少なくとも人類の味方だがな。あのカン―セン達の敵であるセイレンつうのが居なくなったら、奴らは何をしでかすかわからないんだぞ。そんな奴らをどうやって味方と見たらいいんだ?」

???「…………お主、相当にひねくれておるのお、だったら指揮を執るのを辞めたらどうじゃ?辞めることなど造作でも無いじやろうに…………。」

指揮官「それが出来たら、今この場に居ねえよ。ちったあ頭を使えよぼんくらが。」

???「何故に辞めぬのじゃ?つと云ってもセイレンとやらを退治してから辞めるといふことじゃな?」

指揮官「ああ、そうさ、どうせ辞めるなら平和になつてからのほうが良いだろ、だから面倒くさいが仕方なく奴らの指揮を執ってる。」

???「それならば、友好的に接すれば早く済むのではないか?そうすれば良いじやろうに…………何故そうしないのじゃ?」

指揮官「そりゃあ、友好的に接すれば早く済むのは知ってるよ。だがその先は奴らカン―セン―セン達が俺を引き止めようと必死になるだろ。俺はカン―セン達を嫌っているからな、絶対に受け入れない。これは指揮官になつてから最初に決めた事だ。何があつても友好的に接するつもりは全く無い。」

???「……………そこまで頑なに否定するのには、それなりの理由があるのじゃな…………つとそろそろ頃合いじやな」

指揮官「ん?頃合いって何だよ?」

??? 「そろそろ現実のお主が眼を覚ます頃合いじゃな、自身を見つめ直すいい機会になったじゃろう？少しはあのおなご達の事を気遣ってはどうかじゃ？」

指揮官 「……………そうだな、少しは考えてやるよ」

??? 「では、またの……」

指揮官 「おいまたくる気かよふぎけるな。」

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

指揮官 「……………朝か随分と寝た気がするな…しかしあのジジイみたいな声は何だったんだよ。」

指揮官 「……………信用出来る訳ないだろ、家族を…」

KAN—SEN達の流れ弾で殺されたことを………

第陸話 指揮官Side

第五話の三笠と別れた後の執務室にて

指揮官「さて、三笠にあの様な事を言ってしまったのだから、KAN—SEN達のある程度の要求を受け入れないといけない。さてどこまで容認すべきか…その線は引いておかないとKAN—SEN達のやり体放題になってしまう。」

どの様にするべきかを考えを巡らせる中で扉をノックする音が聞こえる。

指揮官「……………誰だ。」

???'「ベルファストです。御主人様、まだ起きていらしたのですか？夜ふかしは健康に良くありませんよ。」

またしてもこのメイドかと思いつまでも扉の前に居座らせるのは流石に悪いだろう。

指揮官「……………とりあえず、入って来い」

ベルファストに入室を促す

ベルファスト「まだ執務中でしたか？」

指揮官「いや、少し夜風に当たってきただけだ、昨日分の執務は既に終わっている。何か用でもあるのか？」

ベルファスト「いえ、執務室の明かりがまだ消灯していなかったと思いますので立ち寄っただけにございます。」

指揮官「そうか、ちょうど良かった。君にいくつか質問をしたいと思う。」

ベルファスト「そのご質問は今で無ければならないのですか？」

指揮官「ああ、今がいい。」

ベルファスト「では、そのご質問とは一体どの様なものにございますか？」

指揮官「ベルファスト、君は今、この母港での艦隊活動に何か不満、もしくは要望などはあるか？差し支えなければ教えてもらえるか？」
俺はベルファストに促す事にした。まあ、ある程度は予想がつくの

で、それ以外の意見が出てくれば彼女らへの対応を少しは改めてもいいのかもしれない。彼女をソファアに座るように促し考えさせる。

ベルファスト視点

私は御主人様に試されてるのでしようか…私はこの母港でも早い段階から配属しているので、御主人様がどのような御人柄なのかはあの程度は理解出来ている…と思いたいものです。半端な答えでは今の艦隊運営状況を変える事は叶わないでしょう…。

私は他の艦隊運営状況を知らない訳では無い、中には暴力的な方が居れば、秘書艦に執務を丸投げをする方もいらつしやる。と聞き及ぶ事は知っているのでそれ等を御主人様と同列にするなど言語道断です。

誰とも顔を合わせないには何かしらの理由があるのではないかとはいえませんが、だからこそ半端な答えを出す訳にはいきません。

御主人様は御一人で作業を邪魔をされて集中力を損ないたくないのでしょうか。私達KAN—SENに干渉を貫くのを緩和するのを…。

今の状況は一部のKAN—SEN達には快く思わない方々もいらつしやるので双方に、メリットが良く且つ落とし所のある妥協点を先程の不満、要望を出さなければいけないのですね。

これは一種の試練でしょうか？海上でのセイレーンとの戦いの駆け引きみたいなものでしょう。それよりも難解な御主人様の発言に私は考えを巡らせることにします。

指揮官視点

ベルファストは考えにふけてしまったようだ。だがそれでいい

のかもしれない。

ここで即答でもすれば艦隊運営を考え直す必要があつたな。

彼女らは今は戦い抜く事しか考えていないだろう。しかしセイレーンとの戦いが終わった後を見据えなければならぬ。

何故なら誰かに依存しなければ生きていけないのは流石に駄目だろう。彼女らにはその時に俺から卒業してもらわなければならぬ。

その為にも彼女らには自主性と意志を持ってもらわないと、もしもこの先戦いが激化して俺の指示通りしかできないとなると臨機応変な柔軟性が必要になる。その為にも俺は邪魔になる…。面倒な事だ…。